

2022年8月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

麻服の質よき皺の身に添はず
畦道を去るまで鼻に騒がるる
風五月海へ傾るる棚田かな
釣竿のとんと撓まぬ薄暑かな
薫風や船頭棹を一突きす
ぱつと散る雑魚やぼとんと紅椿

尾池葉子
大島幸男
原 稔
岡橋啓二
余米重則
伊藤武敏

氷凌集

母の日のたつぷりミモザサラダかな
万葉より麻佐礼留多可良こどもの日
おほかたの鳥の名知らず里若葉
熱り立つ馬を宥めて祭果つ
出力五の水車の勢ふ立夏かな
用水の音かろやかに田水張る

大口彰子
古川邑秋
真下章子
吉田恭子
高橋キセ子
益子桂子

2022年7月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

流れゆく水のきらめき聖五月
鳥帰る帰らぬものへこゑ落し
問はれたる吾は旅人花の径
鶯の一声在を明るうす
大地震来さうな予感亀鳴けり
花筵どの児の筆もさくら色

友永美代子
尾池葉子
大島幸男
岡橋啓二
余米重則
中嶋文子

氷凌集

二輪草絶えしと思ひぬしが増ゆ
純白の今治タオル入学す
段丘に浴ひ来る風や花林檎
橋脚に渦巻く川や柳の芽
病室も宿と思はばうららけし
染料の樹に色の札うららけし

佐藤美智子
大口彰子
羽鳥正子
城島千鶴
古川邑秋
高橋千画子

2022年6月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

誰が似たるか埴輪の面よ野蒜摘む
比良八荒遅延の駅の壁に倚り
啓蟄や歩めば水のにじみ出て
色違ふみづうみ五つ春の雨
交番の手持無沙汰や春の月
院生へ戻る主治医や木の芽風

尾池葉子
大島幸男
三和幸一
原 稔
余米重則
中嶋文子

氷凌集

淡海より京へ難波へ水温む
春分の日や掌に磨く石
鴨川の中空すいと初つばめ
出来たての土竜塚なりいぬふぐり
裏山を背負ふ境内竹の秋
うららかや賽銭箱に「幸千」と

古川邑秋
大口彰子
城島千鶴
佐藤美智子
渋谷啓子
重富國宏

2022年5月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

燕待つローカル線の駅舎古り
浅春や立砂にある雨の跡
春時雨近江の小さき駅に立ち
白魚漁一人となりし四つ手網
船を待つ糶場の屋根や雪もよひ
渡し船の在りし辺りやの残る鴨

友永美代子
尾池葉子
大島幸男
原 稔
余米重則
中嶋文子

氷凌集

熊笹の根方ざわつく余震かな
恋猫の熱き視線や寺の庭
靴飛ばし明日は立春きつと晴
片藪のあらぬ方より雉立ちぬ
闇を来て闇に消えたり寒念仏
山褰の雪は朝日を返しけり

佐藤美智子
古川邑秋
大口彰子
羽鳥正子
吉田恭子
重富國宏

2022年4月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

寒風に毅然と立ちし富士真白	友永美代子
初富士の笠雲育つ午後にして	尾池葉子
鈍空へ浚ひの風の起つ雪野	大島幸男
どんど火の村の四つ角塞ぎをり	原 稔
初糶や鳶口蛸を引き寄せて	余米重則
長靴にリュック背負うて初仕事	中嶋文子

氷凌集

寒の夜や盆地ますます底にあり	古川邑秋
ハーメルンの笛の近づく氷かな	大口彰子
寒禽のぶつかる玻璃に山の空	高橋キセ子
雪積むや往きの足跡踏み復る	重富國宏
雪ばかり見て雪の日の暮れにけり	酒井富子
川と森と鷺の通へる初景色	佐藤美智子

2022年3月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

落ちながら風を捉へて雪蛍	尾池葉子
冬ぬくし包ほどけば鳩の寄り	大島幸男
裸木や緑豊かに寄生二つ	岡橋啓二
凍星やフォッサマグナは海へ果つ	余米重則
海越しの国生みの島冬銀河	伊藤武敏
夕餉にと一本釣りの鰯下げて	中嶋文子

氷凌集

潰えゆく蔵の日月冬桜	佐藤美智子
悴みてぱたと教科書閉ぢにけり	大口彰子
冬ざるる囚人墓地に俱会一処	重富國宏
冬灯し地球儀に夜のうまれけり	古川邑秋
波板の氷柱にダイヤ百万個	羽鳥正子
増ゆるメモ減らすことより年用意	益子桂子

2022年2月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

流れ行く雲の速さよ山の秋
志の輔の嘶にマスクゆるびけり
短日や鴉ひと声あげて去る
小六月まぐらの長き落語かな
水澄むやダム湖の底に石仏
点検終了三つ目小僧のラッセル車

友永美代子
尾池葉子
大島幸男
余米重則
伊藤武敏
中嶋文子

顔見世の招きに鬚眉役者の名
日向ぼこ手品の輪ゴム見え隠れ
反射炉の補強の錆や照紅葉
鳥居潜る寺のありけり鴨遊ぶ
信貴山の声明の宙木の葉飛ぶ
消防の詰所の灯る霜夜かな

氷凌集
四宮陽一
大口彰子
古川邑秋
重富國宏
佐藤美智子
真下章子

2022年1月

氷積の章

尾池和夫選

一病も二病も重ね冬迎ふ
ふるさとの名につられ買ふ新生姜
海原や朝熊へひたと鷹渡る
川風を軽くいなして貴船菊
旨さうな水迸る櫛紅葉
一曲を磨く一年鳥渡る

霞袂集
友永美代子
尾池葉子
岡橋啓二
余米重則
伊藤武敏
中嶋文子

はね太鼓背に踏み出せば月の道
水落し終へ食卓の握り飯
掘り起こす鉛筆ほどの甘藷
天井を歩く蠅螂迷子めく
旧道の空一変す黄落期
基地を囲む月桃の実の弾けけり

氷凌集
四宮陽一
古川邑秋
大口彰子
渋谷啓子
佐藤美智子
屋嘉比順子

2021年12月

氷積の章

尾池和夫選

影笛の御簾に秋風動きけり

霞袂集
尾池葉子

今生の一句を胸に月今宵
歩みゆく先へ先へと虫の声
消えてなほしばし仰ぎぬ秋の虹
秋の夜や仕上げの鑿の当て所

長野眞久
大島幸男
原 稔
余米重則

木の実踏む音の乾きや遺髪塚
たんこぶを撫でてゆきたる蜻蛉かな
稲刈鎌片目閉ぢ診る研ぎ具合
かたくなに補聴器拒み鬼城の忌
嶋立つに法師の歌を思ひみる

氷凌集
中嶋文子
大口彰子
伊藤武敏
羽鳥正子
高橋千画子

2021年11月

氷積の章

尾池和夫選

草刈の神域なれば白き服
草くぐる水やはらかき今朝の秋
雨跡のまだらに乾く路地の秋
秋めくや北より抜くる風の道
星月夜ファドの流るる坂の路地

霞袂集
尾池葉子
長野眞久
大島幸男
原 稔
余米重則

盆僧の無言に正す膳の向き
消ゴムに破るる紙や秋暑し
夕闇や恐竜のごと墓の狩
草は穂に車堰とふ水車跡
川風のきのふと違ふ今朝の秋

氷凌集
中嶋文子
大口彰子
伊藤武敏
佐藤美智子
吉田恭子

2021年10月

氷積の章

尾池和夫選

聖鐘や大夕焼に漂ひて
留学生老いて親しむ麦茶かな
長きもの唾へ蜥蜴の後退る
大丸も祇園祭の大暖簾
噴水の止むとき我に返るとき

霞袂集
友永美代子
尾池葉子
長野眞久
大島幸男
三和幸一

泡盛や南極点へ地図の旅
海中へ鳥の一撃雲の峰
藍甕の藍のぬくみや秋隣
山の子の川は遊び場箱眼鏡
ざつくりと祖父手作りの棕櫚団扇

氷凌集
伊藤武敏
中嶋文子
高橋千画子
羽鳥正子
宮城節子

2021年9月

氷積の章

尾池和夫選

海よりの風が街まで吊忍
葛切や煙雨流るる山の襷
かはほりや駅の階段かく長さ
草原のゲルの一夜や明易し
月蝕の終はり見届け蝸牛

霞袂集
尾池葉子
長野眞久
大島幸男
原 稔
余米重則

ダービーやたてがみ撫づる勝負服
夜濯にけふの失敗流しけり
まだ暮れぬ日をもてあまし更衣
艫を棹に変へ大川の遊び舟
打水や鉄平石に色新た

氷凌集
伊藤武敏
中嶋文子
高橋キセ子
重富國宏
城島千鶴

2021年8月

氷積の章

尾池和夫選

新緑や卒寿の背筋伸ばし行く
帰るさのやたら目立ちて夏蕨
月の出ていま竹皮を脱ぐところ
可杯や鯉のたたき大皿に
津波来し沖の記憶や卯波立つ

霞袂集
友永美代子
尾池葉子
長野眞久
岡橋啓二
余米重則

式典の帽子はみどり植樹祭
不発弾朽ち果つるまま復帰の日
音出さぬ祭太鼓が先導す
つなぐ手を大きく揺らす麦の秋

氷凌集
中嶋文子
屋嘉比順子
吉田恭子
大口彰子

天空に補助線引かむ梅雨の星

四宮陽一

2021年7月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

故郷に似て坂多き町燕来る
剪定や先祖返りの新葉出て
蝶よそこは二十歳に逝きし兵の墓
花まつり稚児の仕上の位星
春愁や生き足りしとも足りぬとも

友永美代子
尾池葉子
長野眞久
大島幸男
原 稔

氷凌集

ヘルメット脱げば甘党花の昼
フェルメールの窓辺は左春日影
嵯峨御所の池に島かや花筏
かげろふや基地建設の地に遺骨
嗣治の乳白色や春闌くる

中嶋文子
四宮陽一
重富國宏
宮城節子
伊藤武敏

2021年6月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

流れ行く雲は何処へ麦の秋
包みても水のこぼるる磯菜摘
椿浮くあたりへ投げて鯉の餌
鴨引きて年縞残る水月湖
春泥の長靴のまま数学者

友永美代子
尾池葉子
長野眞久
原 稔
余米重則

氷凌集

荒川の草焼く原や風は火に
燻製の煙の香る雪解道
涅槃図の壁一面の悲嘆かな
竜天に登り解けたるわだかまり
蝶生る空の高さをまだ知らず

伊藤武敏
中嶋文子
吉田多々詩
佐藤美智子
渋谷啓子

2021年5月

氷積の章

尾池和夫選

雛飾る卒寿の小部屋艶めきて
氷河期の名残の池よ蓐生ふ
古草の身を起したる日差かな
大陸の砂が層なす雪の壁
彫像の鼻先にある余寒かな

霞袂集
友永美代子
尾池葉子
長野眞久
大島幸男
余米重則

落日のはやき山間楮干す
黒鍵の角の磨り減り寒の朝
切落とす林檎の枝や木の根明く
密室を作り上げたる春の雪
くゆらせるやうに出でたるしやぼん玉

氷凌集
伊藤武敏
中嶋文子
高橋キセ子
四宮陽一
大口彰子

2021年4月

氷積の章

尾池和夫選

久女忌や窓を揺がす風の音
初富士や白帆と見ゆるものはなく
猫の皿に日の当りをる三日かな
みづうみはわが町のかほ初景色
暗きより寄せ来る浪や初茜

霞袂集
友永美代子
尾池葉子
長野眞久
原 稔
岡橋啓二

水鳥の棲処ぞ埋めたつる重機
せつかちと言はるる口調浮寝鳥
すつてんと独りずまふや凍つる朝
吉凶はごまめの味の出来不出来
三歳の気ままたふとし初詣

氷凌集
伊藤武敏
大口彰子
中嶋文子
重富國宏
佐藤美智子

2021年3月

氷積の章

尾池和夫選

幾度も自問自答の十二月
鳩ここより瀬田は川の波
万星の凍てて大地にある微熱
振返りつつ歩み去る冬の鷺

霞袂集
友永美代子
尾池葉子
長野眞久
大島幸男

枯蓮や鈍角ありて鋭角も

余米重則

氷凌集

メルカトルの世界地図かけ冬ごもる

伊藤武敏

労きの肩沈めたる柚子湯かな

吉田多々詩

達筆の墨の香円き漱石忌

大口彰子

極月の海より暮るる離島かな

屋嘉比順子

顔見世に大向うなき楽日かな

四宮陽一

2021年2月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

石橋のまなかの窪み露凍る

尾池葉子

神の旅かの狼を供として

長野眞久

凧やつひに根付かぬ一樹あり

大島幸男

気嵐を切り裂く音や漁船

岡橋啓二

浮玉の網の朽ち果て冬の浜

余米重則

氷凌集

奥利根は石ごろごろと水の秋

伊藤武敏

山茶花や隙間に隠す宝物

大口彰子

谿深く岐るる流れ鶉の声

重富國宏

室咲や画廊に大理石の月

佐藤美智子

ひとりづつストーブに寄る舞台袖

中嶋文子

2021年1月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

この谷にまだ先のある葛の花

尾池 葉子

葛咲いてこんな日にこそひだる神

長野 眞久

裏年の柿に没日の速さかな

大島 幸男

独酌を思はず過ごし鹿鳴く夜

原 稔

高稲架の投げ手受け手の調子よき

余米 重則

氷凌集

蛇穴に入るや知恵の輪元通り

大口 彰子

鯖雲や出雲へ行かぬ道祖神

伊藤 武敏

鳶の影いよよ低きを穴まどひ
大泣きの今日の我慢よ夜寒の子
けふの風吉兆として去ぬ燕

高橋キセ子
佐藤美智子
重富 國宏

2020年12月

氷積の章

尾池和夫選

小鳥来る万円筆に足すインク
望の夜の杭に平家物語
をりからの雨意つれてくる昼の虫
ひるがへり合うて帰燕の日の近し
新豆腐しかと木綿の布目跡

霞袂集

友永美代子
有岡 巧生
尾池 葉子
大島 幸男
原 稔

翮干す空に鳶みて猫が地に
鶇高音神宮林を続べにけり
暗算の得意なる子に木の実降る
手火熨斗に書く梶の葉の無の一字
躓きて深酒と知る夜半の月
虜囚の居る闇に蒸し藪置きしこと

氷凌集

余米 重則
岡橋 啓二
大口 彰子
松本 節子
重富 國宏
佐藤美智子

2020年11月

氷積の章

尾池和夫選

小鳥来る他郷と云ふも住み古りて
椅子はみな森へ向きたり今朝の秋
盆花や生者たがひに距離を置き
約束の場所はすぐそこ時計草
単線の脇まで寄せ来蕎麦の花

霞袂集

友永美代子
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
原 稔

もう一つおまけの如く星流る
飛魚や地震に沈みし神の磐
梅を干す天神さんと同じ日に
七夕や小笹に願ひ重すぎて
宇宙人の水切り遊び星流る

氷凌集

余米 重則
岡橋 啓二
重富 國宏
吉田 恭子
伊藤 武敏

2020年10月

氷積の章

尾池和夫選

郭公の遠鳴き牧を横切つて
片陰の尽きてぼつんと駅舎あり
田仕事に出はらふ里の立葵
泉にて憩へば波郷身に近し
客が来て土間の生簀の鰻裂く

霞袂集

尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
三和 幸一
原 稔

氷凌集

夕暮の風拾はむと江戸風鈴
道狭き昭和の団地蟬しぐれ
黒南風や浅間の微動レベル二に
虫送り火の粉渦なす千枚田
英吉利の漱石かくや梅雨の鬱

余米 重則
岡橋 啓二
伊藤 武敏
吉田 恭子
重富 國宏

2020年9月

氷積の章

尾池和夫選

七十五年祈りは尽きず沖縄忌
羽抜鳥軍靴の音が聞こゆるか
鴨川の流れ引き入れ藻刈舟
後脚に怯へを見せて鹿の子かな
九頭竜の水引く生簀鮎の宿

霞袂集

友永美代子
有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
原 稔

氷凌集

廃仏の傷もつ羅漢走り梅雨
解く人のなき舳ひ舟南風吹く
焼夷弾降りきし空へ大花火
郭公の一声谷を深めけり
汗ばみし小銭差し出す心太

伊藤 武敏
余米 重則
重富 國宏
松本 節子
岡橋 啓二

2020年8月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

永らへて故郷の新茶しみじみと
宇治川の流れ去なせる鮎の竿
薔薇の前この気後れは何ならむ
草の野を漕ぎゆく先の花檣
年縞の湖の主通し鴨

友永美代子
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
原 稔

氷凌集

小満やつながつてゐる椅子机
こだま瘦せ戻る立夏の奥秩父
対岸はアメリカ西部花水木
牡丹の揺れ通しなり出城址
天道虫飛び発つ翅を立てにけり

大口 彰子
伊藤 武敏
余米 重則
佐藤美智子
松本 節子

2020年7月

氷積の章

尾池和夫選

一盞を褒めて下戸なり花月夜
嶺越しの風の明るき蕨摘み
流ると見えて澱の紅椿
根巻きせるものを後ろに苗木市
船小屋の網の繕ひいかのぼり

霞袂集

尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
三和 幸一
原 稔

どの像も髭を蓄へ風光る
植込みのこんなところに花通草
ふらここや肩の力の抜き加減
初蝶や新生代の千葉時代（チバニアン）
生垣の高きにほのと花あけび

氷凌集

余米 重則
高橋キセ子
大口 彰子
伊藤 武敏
城島 千鶴

2020年6月

氷積の章

尾池和夫選

宿に脱ぐあす峰入の藁草履
啓蟄や風去りてより星の出て
平凡な日々を綴れば風光る
浅瀬から覗く背鰭や水温む
町おこしの青年移住初つばめ

霞袂集

有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
原 稔

ものの芽のざわめく森の美術館
家ちゆうの時計を伏せて春の夢
春の川跨げば足るに石の橋
晴れてなほ人の恋しき雨水かな
磯の香を逃さぬやうに海苔炙る

2020年5月

氷積の章

御僧と向ひ合せの春火鉢
北東風や海へ出てゆく波がしら
春すでに水影草に日のこぼれ
猛る時もつとも美しき里神楽
春浅し竹屋の土間に縄の束

梅が香や昔粉屋の水車みち
ひと袋とつくに空うよ雛あられ
簪を引つ詰め髪に春きざす
山稜は白きたてがみ山笑ふ
福州園孔子足下の蝶二頭

2020年4月

氷積の章

この里の自慢の棚田初明り
初富士を過ぎ夕方の初比叡
適業は農業とあり初神籤
福笹や大和大路の往き戻り
原子炉の岬揺るがす鱈起し

溶解炉脇に小さき鏡餅
このまちなあの時の土水仙花
曇天の空を開きぬ寒椿

氷凌集

余米 重則
大口 彰子
伊藤 武敏
城島 千鶴
重富 國宏

尾池和夫選

霞袂集

有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
三和 幸一

氷凌集

城島 千鶴
服部喜美子
宮城 節子
遠藤 長代
屋嘉比順子

尾池和夫選

霞袂集

有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
原 稔

氷凌集

伊藤 武敏
大口 彰子
吉田 恭子

餓鬼大将に全勝したる喧嘩独楽
白川の浅きを歩む寒の鳥

重富 國宏
城島 千鶴

2020年3月

氷積の章

尾池和夫選

頑固さが顔に出てゐる焼芋屋
かささぎの空巢に裸木の高さ
何待つとなくひとりゐて霜の声
なにやらのいはくの札や銀杏散る
猪鍋や鴨居分厚き山の宿

霞袂集

有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
原 稔

氷凌集

落日や鯉跳ぶ音へ鳩の首
露座仏の膝に冬蝶石と化す
六屯の鐘撞き継いで去年今年
一撞きに萬を願ひ師走来る
冬銀河時間の糸をほどきけり

伊藤 武敏
余米 重則
四宮 陽一
吉田 恭子
大口 彰子

2020年2月

氷積の章

尾池和夫選

神苑の木戸開いてゐる神の留守
先生の机に白き冬の薔薇
柩閉づるときさはさと菊香る
その底に小さき花あり枯葎
寄る歳に追ひつ追はれつ花八手

霞袂集

有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
原 稔

氷凌集

凧や軽くなりたる雑木山
散紅葉魔法の絨毯やも知れぬ
柿簾唱歌の里にゐるがごと
落葉掃の日課となりて老医かな
蔦枯るる煉瓦造の発電所

佐藤美智子
大口 彰子
伊藤 武敏
余米 重則
城島 千鶴

2020年1月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

山麓に艾草売る店鳥渡る
朝まだきコウヤマンネンゴケに露
萩の道この淋しさは何ならむ
沈む陽の透けて芒が原の路
野良仕事ひとつ終へれば秋深し

有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
原 稔

氷凌集

カンバスの白き地塗や割柘榴
内戦の深き弾痕秋暑し
樽柿や風はや光りだす会津
月を待つ蹲踞の水溢れしめ
日と風と適ひて茸干し上る

余米 重則
四宮 陽一
伊藤 武敏
吉田 恭子
佐藤美智子

2019年12月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

とりどりの雲競ひ合ふ野分あと
木の実落つただそれだけの日なりけり
青空にもつとも近き盆の家
灯の透きて秋の簾となりにけり
乗換へて山近くなる吾亦紅

友永美代子
有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男

氷凌集

石組に氣勢競ひて秋の庭
ふるさとの銀座通や秋の風
本棚の一冊逆さ秋灯
秋澄めり頂上へ打つ尾根の鐘
掌に余る形見の硯洗ひけり

原 稔
重富 國宏
大口 彰子
佐藤美智子
吉田 恭子

2019年11月

氷積の章

尾池和夫選

霞袂集

家中の灯点して終戦日
空海も見たる不知火かと思ふ

友永美代子
有岡 巧生

病室に待つ名月となりにけり
墓じまひしたる更地や晩夏光
大の字の瘦せて月出る如意ヶ岳

尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男

蛸壺は綱解かれて夏終る
末つ子のいつも真ん中秋の空
馬塞に沿ふ馬の並足爽やかに
晩夏光湖底に昔日の暮し
秋めくや支へ木増ゆる寺の松

氷凌集
余米 重則
大口 彰子
高橋千画子
佐藤美智子
原 稔

2019年10月

氷積の章

尾池和夫選

武蔵野の山々つなぎ雲の峰
浮いてこい吾等人間探求派
雨団扇おくれがちなる夏芝居
萍を騒がせ鯉の産卵期
夏見舞ひと文字替へて乱れけり

霞袂集
友永美代子
有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男

そこのけと電気くらげの横泳ぎ
天地指す像の手のひら原爆忌
境内をとばしる清水時太鼓
白山の見えぬを指して梅雨深し
緑蔭や尻遅しき馬車の馬

氷凌集
余米 重則
原 稔
岡橋 啓二
佐藤美智子
高橋千画子

2019年9月

氷積の章

尾池和夫選

絶ゆるなきわだつみの声沖縄忌
殺生のあとの閑けさ蟻地獄
海霧を来る三陸鉄道昼灯し
南風や十大弟子の強面
水無月の学舎に近き喫茶店

霞袂集
友永美代子
有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男

氷凌集

メビウスの帯に乗せたき蟻の列
あぢさゐや鞆持たせて駆け行く子
神宮の旬日早き茅の輪かな
伊集の花散つて気根に戻しけり
時の日や電波時計のあいそなし

余米 重則
大口 彰子
重富 國宏
屋嘉比順子
原 稔

2019年8月

氷積の章

尾池和夫選

夏めくやさくさくと切る生野菜
更衣いつもの吾がゐて遺憾
いづれまた火の山となる新樹かな
若竹のまだ風呼ばぬ青さかな
銅像の蒼き涙や椎若葉

霞袂集
友永美代子
有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男

太刀舞を継ぎ若者の祭足袋
逆立ちの震へ小刻み若葉風
農道に水の溢るる田植時
船頭の筑後なまりや遊び舟
記念樹の屋根に届くや子供の日
雲版の一打に夏の立ちにけり

氷凌集
余米 重則
大口 彰子
佐藤美智子
重富 國宏
原 稔
松本 節子

2019年7月

氷積の章

尾池和夫選

岩礁に釣人残し春の船
鶯の結語五音に納めたる
掌に零す薄荷油霾ぐもり
岩盤に残る化石や花こぶし
初夏の珊瑚の海やぬちぐすひ

霞袂集
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
三和 幸一
矢削みき子

高きより棟梁の指示風光る
遣り水の七曲りして花筏
舟屋より出て春光へ舳先向け
散髪の後の鼻歌春の虹

氷凌集
余米 重則
松本 節子
柴田 靖子
大口 彰子

京大のロゴの樟若葉せり

重富 國宏

2019年6月

氷積の章

尾池和夫選

雛の夜の二段ベッドの上と下
一礼に去る大仏の春の闇
春陰や鳥の眼をして風を読む
淀川の始まる辺り野火烟る
白魚に大きすぎると言ふ理由

霞袂集

有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
矢削みき子

金メダルかけて呉る子つばくらめ
磯漁の魚分け合ふ浜うらら
水郷と呼ばるる在の下がり雛
別件は遊びの誘ひ水温む
鷹化して鳩となり児に追はれけり
大原の霞へ帰る野菜売

氷凌集

大口 彰子
原 稔
重富 國宏
余米 重則
佐藤美智子
柴田 靖子

2019年5月

氷積の章

尾池和夫選

さにつらふ色に芽の出る雨水かな
春遅しバスの手摺の静電気
石垣の石の隙間に春兆す
灯明のひとすぢに春立ちにけり
土のにほひ水のにほひや木の根明く

霞袂集

尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
三和 幸一
矢削みき子

薄氷や光溶けゆく水の中
鬼は内むかし九鬼氏の城下町
麦踏むや筆のはげしきゴッホの絵
耳長き犬の飛び付くしやぼん玉
杉玉の軒に吹き溜め玉霰

氷凌集

吉田 恭子
重富 國宏
余米 重則
大口 彰子
松本 節子

2019年4月号

氷積の章

尾池和夫選

賀状読む一枚づつを声にして
待春や横向けといふ似顔絵師
鷺替の渦や気づけば外へ外へ
風花をいひ平城山をふりかへる
みづうみの波かさねあふ春隣

霞袂集

友永美代子
有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
三和 幸一

氷凌集

昆虫の標本並ぶ寒さかな
花びらのガラスと化しぬ寒の薔薇
荒々と馬が土掻く鳥総松
箸紙に恙なき名を十いくつ
海苔簍の有明海を埋めてをり

大口 彰子
余米 重則
吉田 恭子
柴田 靖子
重富 國宏

2019年3月号

氷積の章

尾池和夫選

太白星の寒さ類族改め帳
枯蓮のもう触れ合ふといふをせず
十一面のひとつが後ろ冬深し
年惜しむ杉の古木に手を当てて
糠床と労ひ合うて小晦日

霞袂集

尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
三和 幸一
矢削みき子

氷凌集

珈琲にはこのチョコレート冬日向
湯豆腐やひと雨きたる苔の庭
抜き足の次は差し足池普請
靴下に溢るる駄菓子クリスマス
相輪の空突く高さ山眠る

余米 重則
松本 節子
重富 國宏
大口 彰子
吉田 恭子

2019年2月号

氷積の章

尾池和夫選

音読の宇治十帖や菊日和
下京へ時雨の雲の至りけり

霞袂集

友永美代子
尾池 葉子

伐採のあとの明るし冬の鴉
短日や幾度も峰を振返り
いつの世の鏝跡とや日向ぼこ

長野 眞久
大島 幸男
矢削みき子

小春日や吠ゆる仔犬の名はサスケ
寒昂指もて示すあの辺り
寒鰯や力士のやうに塩を振る
垣根なき隣と落葉焚きにけり
初冬の波遊びたる島嶼かな

氷凌集
余米 重則
重富 國宏
大口 彰子
原 稔
屋嘉比順子

2019年1月号

氷積の章

尾池和夫選

話また久女に戻る菊枕
白露や灯のつつましき屋敷町
龍淵に潜み青空堕ちてきし
火の山の微かな煙蕎麦を刈る
みづうみと言ふ月光の器かな

霞袂集
有岡 巧生
尾池 葉子
長野 眞久
大島 幸男
三和 幸一

ベネチアの仮面の笑ふ夜寒かな
鹿垣をつくろふ村の役となり
奥嵯峨の竹伐る音の響きあふ
秋日受け岩の錆びなる黄金色
半眼の麒麟の咀嚼天高し

氷凌集
余米 重則
原 稔
松本 節子
重富 國宏
大口 彰子